

## 漢譯の佛典について

支那の佛典が佛教の本國なる印度の經から翻譯せられ、從がつて印度の言葉所謂梵語から支那の言葉に譯せられたものであるといふことは、以前から最も普通に認められて居ることであつて、今日とても之については大した異論を聞かぬ様に思ふ、併しながら少しく仔細に佛教東傳の事情を考がへ、之を近時駿々として進みつゝある東洋學の研究の結果と參照して見ると、或は此間に少しく疑を置くべき餘地がありはせぬかと思ふ。

佛教が始めて支那に傳はつた時代を何時とするかは、こゝに述べる所と關係しない、假令ばそれが前漢哀帝の時であつたとしても、或は最も普通に稱へられて居る様に後漢の明帝の時であつたとしても、其經が支那に翻譯せられて今日に傳はつて居るのは、後漢の桓帝の頃からとして差支へないからである。最も明帝の時に天竺の人摩騰、法蘭の二人が支那に來て、四十一章經以下佛本行經、十地斷詰經、二百六十戒合異法海藏經、佛本生經等の諸經を翻譯したといふことが大唐內典錄等の經錄に出て居るけれども、四十二章經の外は今日に存して居ない、そうして此四十二章經も、以前から色々疑問をかけられて居るものであつて、多くは偽作といふことに一致して居る様である、此後八十年間程は佛僧が支那に來たこともなく從がつて佛教の消息は支那に於て認めることが出來ない、桓帝の建和二年（西紀一四八年）に安世高の來たのを始めとして（建和元年に支婁迦讖が來たともいはれて居るけれども異説のあ